

幻の風景に包まれた記憶

太田治子
島村菜津
水島久光
三輪太郎



月刊『望星』の第二回食の思い出エッセイ募集「私の思い出。あの日の味」(入選作は前号で発表)の作品選考会は、二〇一八年四月十八日に、東京・新宿区の『望星』編集部で開催された。選考会終了後、選考委員の方々に感想を語り合ってもらった。

(構成・編集部)

編集部 本日はおつかれさまでした。最終選考では、最年長は八十六歳の方から最年少は十六歳の方のエッセイまで、四十二

作品を読んでいただきました。

島村 今回も最後まで悩みましたね。皆さんの作品が読みごたえがありました。

三輪 二年前の第一回もそうでしたが、食のエッセイでありながらリアルで貴重な歴史証言にたくさん出会うことができました。

編集部 優秀賞になった栗田陽二郎さん「おでん」の味とやさしさとは、東京オリンピックの年、昭和三十九年の東京が舞台の作品でした。

太田 いまはバタ屋部落と言うのはいけないのかもしれないけれども、私たちは、歴史の中でこういう現実があったことを忘れてしまっただけではないとあらためて思いました。エッセイ

に出てくるリヤカーと覚しき荷車も懐かしいものでした。

島村 リヤカー、懐かしいな。

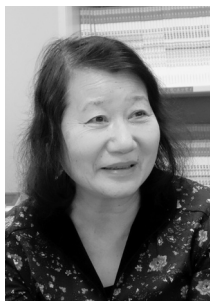
太田 しかも、ただのリヤカーではないんですね。引き役として、お犬さまが二匹も働いている。こういうところがたまらなく私は好きですね。いまはこんなふうにして犬が働いている姿は、見たくても見られないものです。エッセイの最後で、三人でおでんを食べることができて本当によかったと思います。温かい気持ちに包まれました。この作品には、忘れてはならない大切な五十三年前の東京の姿がありました。

水島 僕は、今回初めて選考に参加しましたが、皆さんが書かれたエッセイは、どれもが特別な思い出なのだという気持ちでいっぱいになりました。大切な思い出は、切っていくという読み方で読んでいくことができます

せんので、拾っていく意識で読んでいきました。そういう視点に立つと、皆さんの作品から忘れかけていた自分自身のパーソナルな思い出がよみがえってくるのが不思議でした。

僕はこのエッセイを読みながら、子供時代を過ごした葛飾の近くの荒川の風景を思い出していました。京成線で荒川を渡るたびに、川沿いにバラックがぞろぞろと建ち並んでいるのが電車の窓から見えていたんですね。いまではもうなくなってしまう東京の風景です。

太田 バラックという言葉もいまは聞かなくなりましたね。先の戦争では家族や大切な人を亡



●おおた・はるこ
1947年生まれ。作家。著書に『明るい方へ 父・太宰治と母・太田静子』『夢さめみれば 日本近代洋画の父・浅井忠』『星はらはらと 二葉亭四迷の明治』など。

くして、住む場所を失ってしまった人がたくさんいました。町にはバラックも建っていました。少し前の日本には、そんな風景が存在していたのです。最近、私たちはこの国が歩んできた歴史を少々忘れがちではないかと思っております。

三輪 作品中に出てくるクリスマス・ヴィレッジは、上智厚生事業団が運営する集落と書かれています。作者の栗田さんは当時、二十二歳の学生。修行僧の見習いをしていましたから、仏教系の大学で学んでいたのか、それともキリスト教系の大学で修道院に入る準備をしていたのでしょうか。「彼は多く

を持てる中からではなく、少しの中から多くを差し出してくれました。聖書の中で出逢うような美しい言葉がありました。

父の思い出をめぐって

編集部 選考会では、さまざまな「父の味」をめぐる作品も話題になりました。優秀賞の室屋尚明さんの「三等兵と水餃子」は、戦争体験者の父の味をめぐるエッセイでした。

三輪 この作品は三等兵という言葉が重く響きましたね。兵隊の最下位は二等兵。でも、帝国陸軍にいた父親は、「俺は三等兵だったからな」と言う。この父親は敵と戦うことの前に、軍隊組織の内部で相当ひどい抑圧を受けていたのではなかったのでしょうか。

その元兵士が、戦地で作り方を覚えた焼き餃子を、子供にお

なかいつぱい食べさせている——かなりねじれた、切ない状況ですよ。子供たちが餃子をほおぶるのを見ながら、彼は泥酔していた。僕は通勤電車の中で読みながら、涙がこみあげさうになりました。

水島 うちの父は昭和二年生まれでしたが、よく自分をポトピープルだと言っていました。奄美諸島の出身で、終戦の混乱時に島を出て、船で九州に流れ着いた経験を持つってするので。今回の選考で、戦争体験や戦争体験者が出てくるエッセイを読んで思ったのは、戦後世代の我々が想像している以上に、自分の尊厳を傷つけられた経験として、戦争を記憶してる方が多いのではないだろうかということです。

島村 私はこの作品は、戦争のことを抜きにしても、食べ物